高等学校新課程における「書く」学習を展開する過程で語彙を豊かにする国語科授業の試み

時・場所　令和 5 年 8 月 22 日　／於　四　国　大　学
発表者　徳島県立川島高等学校　山　根　浩　明

１．本校の紹介

徳島県立川島高等学校は大正 14 年（1925）に徳島県立麻植中学校として創立。来年度創立百周年を迎える。本校は普通科であり、多くの生徒が進学を希望しているが、就職する生徒も一割程度存在する。進路先は、四年制大学が最も多く、専門学校や短大進学者も多い。国公立大学進学者は二割弱であった。

生徒数は一年生が 126 名、二年生が 109 名、三年生が 121 名、計 356 名である。内、男子が 148 名、女子が 208 名である。部活動では、サッカー部、野球部、剣道部が有名であり、それぞれ全国大会に出場経験がある。

２．国語科教育実践上の課題

⑴　国語科授業における生徒の実態と課題

本校の生徒の特徴として、「おとなしく真面目な生徒が多い」というところが挙げられる。ここ数年は特に、新型コロナウイルスの影響もあり、非常に静かで落ち着いた授業が増えている。その反面、授業などでは発言やグループ活動が制限されていたこともあり、生徒自身の意思表示する力やコミュニケーション力の低下を感じている。不登校や生徒間トラブルも増えているが、その生徒に話を聞いても、うまく自分の感情を表現できなかったり、自分の考えを説明したり折衝したりすることができないことによってトラブルにつながっている事例が散見された。

そこで、国語科としては、語彙力の低下が思考力やコミュニケーション力の低下を招いているのではないか、と考えた。語彙が増えていない原因は、読書離れ、スマートフォンの使用、SNS における短文コミュニケーション、YouTube などの動画視聴による受け身の姿勢など、環境的な要因が大きいと推察される。よって、国語科の授業における語彙獲得の役割はさらに大きなものになってくる。国語科授業における活動の中で、生徒の語彙を増やすことによって自分の感情や考えを正しく表現できるようになり、彼らの生きる力の一助になると考えた。また、進学希望者が多く、生徒たちの確かな力の獲得につながる語彙を豊かにする指導を心がけた。

⑵　実践研究のねらい

このような課題意識の上に立って、実践研究の課題を次のように設定した。

①研究テーマ

令和４年度より高等学校でも平成３０年告示の新学習指導要領における新科目「現代の国語」と「言語文化」がスタートした。この教科では、これまでの「国語総合」に比べ、「読むこと」の割合が減り、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の割合が増えている。これは、講義形式の授業だけではなく、アクティブラーニングなどの視点に則って、生徒主体の授業をしていくべきだということであろう。そこで、「現代の国語」「言語文化」「論理国語」における主体的な「書くこと」の指導を通して語彙を豊かにするためにはどうするべきか、ということを研究テーマに掲げた。ここでは、受け身になりやすい講義形式の授業よりも、主体的に「書くこと」において、語句に注目させることによって、語彙を豊かにすることをめざしたい。

②語句と語彙

ここでいう語句とは、高校生として「知っておくとよい言葉」を指しており、漢字、単語はもちろん、慣用句や小説における特徴的な言い回し、連語なども含むこととする。語彙とは、その語句の集合体であり、大学受験をする高校生の知識として、また、感情や意思を表現するスキルとして、獲得しておくとよいもの、と定義する。そもそも、大学入試共通テストに出てくる語彙というのは、共通テスト作成者においても「高校生が理解するべき言葉」として、出題されていると考える。そのような語彙を獲得し、使いこなすことができるということが、高校生としての適切なコミュニケーション力の獲得につながると考える。その上で、その語句・語彙が「増やしていくことによって、人生が豊かになるもの」であることが望ましい。

３．実践研究１―「言語文化」『羅生門』におけるリライトの場合―

⑴ **対象クラス**…令和４年度　普通科１年１組

⑵ **授業科目**……「言語文化」

⑶ **単 元 名**……『羅生門』の表現を用いたリライトを作成しよう

⑷ **教材編成**……『標準言語文化』第一学習社『羅生門』→教科書教材を使用。

⑸ **単元の構想**

『羅生門』は、現在も定番の教材として扱われており、近代文学の巨頭である芥川龍之介の代表作である。初出は 1915 年であり、100 年以上が経過しており、生徒にとっては馴染みのない語句も多い。しかし、大学入試共通テストでは現在も小説が出題されており、加能作次郎（1885 年生まれ）など、近代文学が扱われている。そこで、芥川龍之介『羅生門』について、ただ読むだけでなく、表現に着目して「書くこと」を行い、自身で近代文学の特徴的な表現を使用することによって、語彙を獲得することができるのではないかと考えた。また、高校生になって初めての「書くこと」の授業となるので、「言語文化」の小説の分野を選択し、おとぎ話のリライト、という楽しんで取り組めるものにすることで、「書くこと」に対して抵抗感なく取り組んでほしいという意図もある。

⑹ **単元の指導の実際**

①第一次

『羅生門』の本文を学習する。学習前に「『羅生門』の特徴的な表現集」を配布しておき、表現に着目しながら本文を理解する。

②第二次

タブレットの Word を使い、『羅生門』の表現を用いたリライトを作成する。具体的には、浦島太郎、桃太郎など、誰もが知っているおとぎ話をベースとすることを条件をして、『羅生門』の特徴的な表現を使用しながら、自らの作品としてリライトしなおすことを課題とする。完成した課題は、MicrosoftTEAMS を使い、アップロードし、保存する。

③第三次

MicrosoftTEAMS にアップロードしているそれぞれのリライトを、各自のタブレットでダウンロードし、班員の作品を相互に閲覧して Classi で評価する。評価の高かった作品については、班の代表として、全体の前で発表を行う。

⑺**実践の成果と課題**

おとぎ話のリライトを初めての「書くこと」の課題として設定したのは、「書くこと」について抵抗感なく楽しんで取り組んでほしいという思いがあったからである。小さい頃に読んだおとぎ話を思い出しながら、芥川龍之介の表現と融合させて、楽しみながら書くことに取り組めたと思う。「書くこと」の導入としては一定の手応えがあった。評価に関してはルーブリック評価などは行わなかったが、授業後の検討会では、ルーブリック評価などの制限を行わなかったがために、逆に生徒の想像力が自由に発揮され、よい作品が多かったのではないか、という意見も出た。感想なども、「楽しかった」「同じ作品でも違う作品のように思えた」というように前向きなものが多かった。生徒は『羅生門』の中から、「〇〇の行方は誰も知らない」「雨やみを待っていた」「にきびを気にして」「黒洞々たる夜」など連語のような語句を選ぶことが多かった。反省点として、本当に語彙を豊かにすることができたのか、という意見も出た。しかし、導入としては、ある一定の効果があり、語彙としても特徴的ではあるが、近代文学的な語彙に触れることができたことは収穫だと考えている。

次回以降は、ルーブリック評価などの体系的な手法についても実践に取り入れていきたい。語彙に関しては、授業者が選んで提示したために、生徒が本当に主体的に選んだとは言えない。次回以降は、生徒に「身につけたい語句」を選んでもらう取り組みも必要ではないか、と反省している。

【生徒感想】

・リライトを作成することによって、語彙が増えたと思う。『羅生門』をほかの作品に作り替えることがとても楽しかった。

・同じ作品でもそれぞれに話のストーリーが違っていたり工夫している表現があり、面白かった。

・自分が考えもしなかったような視点からの語彙などを知ることができた。表現の違いや同じお話でも、人それぞれ感じ方が違ったので個々がもつ語彙の違いや使う言葉の違いによるものだと思った。

生徒作品①

リライト浦島太郎

一人の下人が、竜宮城の門の下で満ち潮を待っていた。門の前にただ広がる大海には、この男のほかに誰もいない。この三日、下人は我を忘れて宴をしていた。そこで、竜宮城の過ごし方は一通りではない。ふと、年老いた母の顔が思い出された。作者はさっき「一人の下人が満ち潮を待っていた」と書いた。しかし、正確には「こんな楽しい場所を離れるべきだろうか、いや離れるべきでないと葛藤している」という方が適切である。下人は、なぜ自分がこのような状態になったのか、にきびに手を当て考えていた。それは三日前の朝のことだ。下人は海辺で、一匹のかめが大勢の童にいじめられているのを見つけた。下人は、童たちの無邪気な悪に対する憎悪が生まれた。いや、あらゆる悪に対する反感がふつふつと煮えたぎったのである。

「何をしている！やめろ！やめぬと、これだぞよ！」下人は聖柄の太刀に手をかけた。

20 × 20

童たちは両手をわなわなと震わせて一目散に逃げていった。すると、かめがお礼に竜宮城へお連れすると言うではないか。下人は見るものすべてが目新しい辺境の地へと旅立った。

「俺はまだ美しいと言われている乙姫に会った。声が聞こえ、下人ははっと意識を取り戻した。耳元へ「乙姫様がお呼びです」という囁きのである。

ていないではないか。このまま帰れるものか。」と、大広間へ向かい歩き出した。下人は、六分の恐怖と四分の好奇心を胸に待った。だが、現れたのは檜皮色の着物を着た、猿のような老婆である。老婆の喉から、蛸がうめくような声が下人の耳へ伝わってきた。「どうぞいつまでも、好きなだけいればいいと思うのじゃ」。下人は、乙姫の見た目が存外、想像と違うことに失望した。下人にはより強く、より鮮明に母の顔が思い出された。下人の心にはある勇気が生まれてきた。そうして、かめを助けたときの勇気とは、全然、反対な方

20 × 20

向に動こうとする勇気である。下人は、近くにあった「玉手箱」と呼ばれるそれを手に取り、「では、俺が竜宮城の物を持ち去ろうと恨むまいな。俺もそうしなければ、割に合わぬ気持ちなのだ。」

下人は魚たちを押しのけすばやくかめにまたがった。浜に帰った下人を待つのは、見たことも無い村の様子だった。そこには愛しき母もなく、家もない。下人に広がるのは、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。手に握った玉手箱が、どす黒く輝いた。下人の行方は、誰も知らない。

20 × 20

生徒作品②

リライト桃太郎

一人の下人が、桃の中で雨やみを待っていた。桃の中には、この赤ん坊のほかに誰もいないこの二、三年の京都は、大雨が続いてなぜ、桃の成長の仕方はひとおりではない。大きくなりすぎたこの桃は、気味悪がられて誰にも拾ってもらえなかったのである。作者はさっき「一人の下人が、桃の中で雨やみを待っていた」と書いた。しかし、正確には「誰もこの桃を拾ってくれない。どうしようと言う方が適当である。

あるとき、檜皮色の着物を着た、猿のような老婆がこの桃を拾って、くれた。すると、この老婆はこう言った。

「おいしそうな桃じゃ。おじいさんと、いっしょに食べるとするか。」と。家に帰り、老婆が桃を切ろうとするが、力がない。のか両手をわなわなと震わせている。下人は心の中でこう言った。「何をしている！切れ！切らぬとこれ

20 × 20

だぞよ。「下人は桃太郎と名付けられたのである。」老婆を蹴った。すると、桃は割れたので中から

暴れている気に出す年になった頃、遠くの島で鬼が

下人は、

手をかけ、脅した。

鬼ヶ島に行き、無事に鬼を倒した下人は、

島にある宝をすべて奪い、仲間を拾て、船を

出した。海には、ただ、黒洞々たる鬼の死体

があるばかりである。下人の行方は誰も知らない。

ない。宝の行方も誰も知らない。老婆と仲間

の生死も誰も知らない。

れ！ならぬとこれだぞよ！」と聖柄の太刀に

で通りすがりの犬、猿、きじに「仲間になる

た。しかし、下人には、仲間がいない。そこ

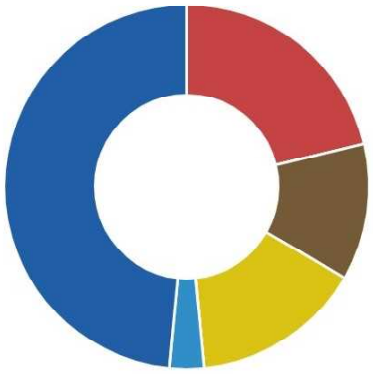
と四分の好奇心を胸に鬼ヶ島に行くことにし

20 × 20

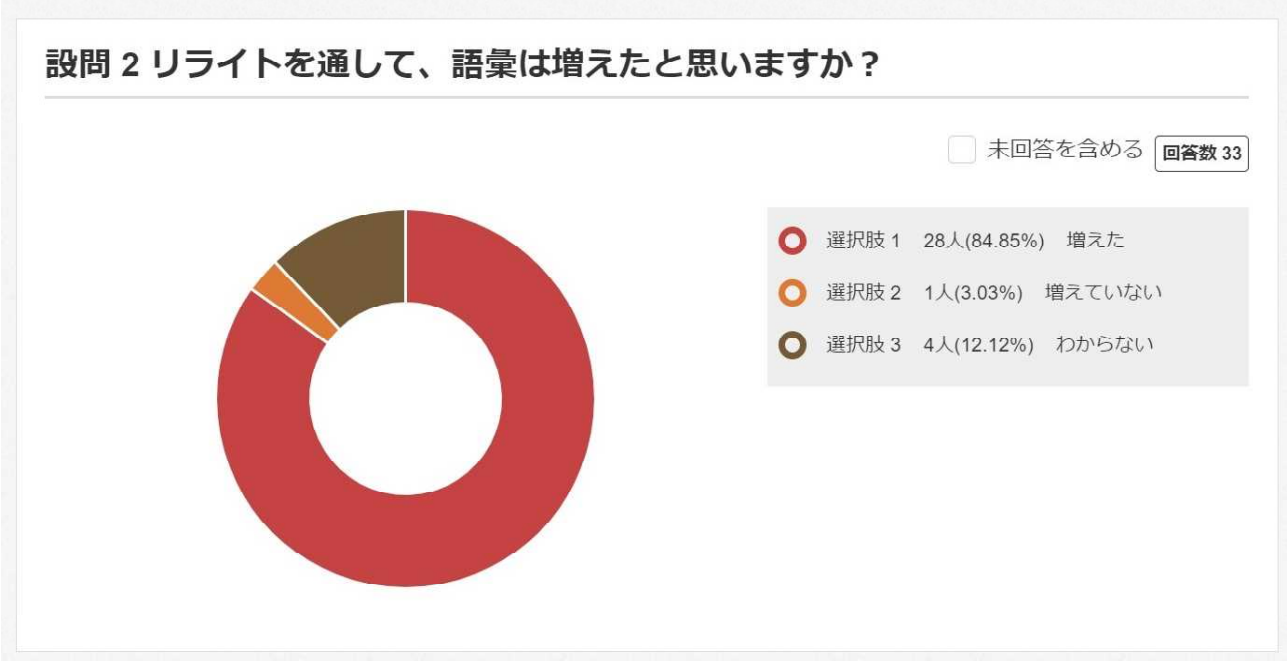
リライト　発表会

設問 1 一番良かった発表を選んでください。

未回答を含める　回答数 33



- 選択肢 1　7人(21.21%)　Aさん
- 選択肢 2　0人(0%)　Bさん
- 選択肢 3　4人(12.12%)　Cさん
- 選択肢 4　5人(15.15%)　Dさん
- 選択肢 5　0人(0%)　Eさん
- 選択肢 6　0人(0%)　Fさん
- 選択肢 7　1人(3.03%)　Gさん
- 選択肢 8　16人(48.48%)　Hさん
- 選択肢 9　0人(0%)　Iさん



４．実践研究Ⅱ―単元「現代の国語」戦争を知らない世代として自分にできること―

⑴ **対象クラス**…令和４年度　普通科１年１組

⑵ **授業科目**……「現代の国語」

⑶ **単 元 名**…… 単元「戦争を知らない世代として自分にできること」

⑷ **教材編成**…… ①「黄色い花束」（黒柳徹子／第一学習社『標準現代の国語』）
②『世界から戦争がなくならない本当の理由』（池上彰／祥伝社新書）自主教材

⑸ **単元の構想**

生徒は二学期に、『羅生門』のリライトと、小論文の書き方についての指導、小論文模試を経験している。それらを踏まえて今回は、随筆や説明文を教材として、意見文を作成することを課題とした。前回は近代文学における語彙を獲得することで、近代文学についての学びを深めたが、今回は、説明文、とりわけ現在ヨーロッパで起こっているウクライナとロシアの戦争にも関連させて、「戦争」をテーマに「書くこと」を学習することで、戦争や現代社会についての語彙を増やすことを目標とした。

⑹ **単元の指導の実際**

①第一次

黒柳徹子「黄色い花束」を学習する。

②第二次

池上彰『世界から戦争がなくならない本当の理由』の序章とあとがきを読む。その中で、「わからなかった語句」を MetaMojiClassRoom を使い、タブレットのアプリ上にアップロードする。その「わからなかった語句」に関しては、授業者が簡単に意味を調べて、生徒にプリントにまとめて還元した。

③第三次

タブレットの Word を使い、二つの文章を読んで「戦争を知らない世代として、自分に何ができるのか」という題で意見文を書く。第二次でわからなかった語句についてプリントで学習しているので、そのような語句も使用するように指導する。段落構成などは、小論文模試での指導を生かし、読み手に伝わるような構成を心がける。

④第四次

発表会を行い、相互評価する。

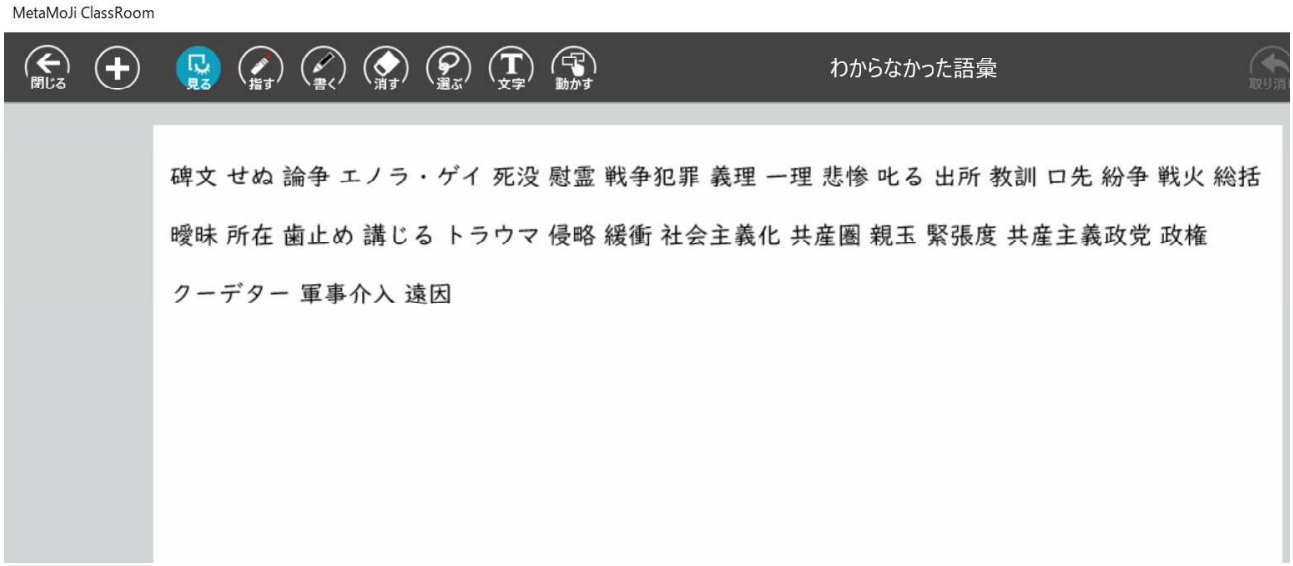
⑺ 実践の成果と課題

今回のテーマは、「説明的な文章」と「読み比べ」である。二つの文章を読み比べて意見文を書いたことは、大学入試共通テストや課題文型小論文に生きてくると考える。

そして、「書くこと」の取り組みは、生徒が前向きに生き生きと主体的に書こうとすることが大切だと考える。そこで、授業当時話題になっていたウクライナとロシアの戦争に関連させて、「戦争」をテーマとしたことで、生徒自身も身近な話題として真剣に取り組めた。二学期の実践で、導入的な文学的な文章を取り上げ、さらにホームルームでの小論文指導や小論文模試を経験して、段落構成などを理解した上で意見文を書けたことは、説明的な文章を理解する上で必要なことであり、順調にステップアップしていると評価できる。語彙に関しても、今回は生徒にわからなかった語句を選んでもらい、意見文作成に生かすことができたら、と考えたが、「緩衝地帯」「東西冷戦」などは多く使われたが、多くの言葉は第二次世界大戦に関する語句などで、使用の仕方が制限されすぎており、ほとんど使われなかった。次回は、生徒とともに、「身につけた方がいいと思う語句」を選定することで、「書くこと」の作品の中にも、学んだ語句が多く使われるようにしたい。そして、使われる中で、その語彙が理解語彙から使用語彙へと定着していけるようにしたい。

評価に関しても、発表会での評価や教師による主観的な評価に終始してしまった。その反省を生かし、実践研究Ⅲでは、理解語彙をいくつ身につけるか、数的なノルマを設定し、ルーブリック評価を用いることで、客観的な評価につとめたい。

☆ MetaMojiClassRoom の使用例　生徒の画面の一例



生徒作品

戦争を知らない世代としてこれからもずっと学んでいくこと、それは自分にできる戦争についてこれから学んでいくのかだと思います。

なぜそう思ったのか、それは「世界から戦争がなくならない本当の理由」と「世界大戦の例を挙げた話にあります。第二次世界大戦の反省から新たな戦争を作ることは重要なことだと思います。

なぜ、どう学んでいくのかだと思います。

なんで改めてそう感じましたか。

なくならない本当の理由「と「世界から戦争がなくなるのか。

すべてが「黄色い花束」の二つの文章を読んで私は「戦争へのしょうかい」と「戦争を深く考えるためのきっかけを知らない世代に、それぞれのやり方で学ぶのではなく、もっと戦争を深く考えるために、どう学ぶのかを知ることはわかりますが、間違った行動だったといえるこ。

20 × 20

今起きている戦争、「黄色い花束」にあるように戦地に赴きます。

特に戦争へのしょうかい方は色々あると思います。

戦争はないとい

動に移すは難しいですが、その場で感じて行

うことは重要なことだと思います。

考える、戦争に逃げ場のない真剣に考えるこ

向き合う、戦争を作るとい、それは私たち

ちのような戦争を知らない世代に、一番必要な

ことでは、自分のかと私は思いますが、それは初

最後に、自分に何ができるのかを学ぶ

めに言った、ようにこれからも学んでいくこ

ですが、黒柳徹子さんも、池上彰さんも学ぶと

を起こさない、ためにそれぞれのやり方で学び

ましたが、私も同じようにそれぞれのやり方で学ぶのではなく、もっと戦争を深く考えるためのきっかけを知ることはわかりますが、間違った行動だったといえるこ。

20 × 20

５．実践研究Ⅲ―単元「論理国語」環境に関する意見ポスターをつくろう―

⑴ **対象クラス**…令和５年度　普通科２年１組

⑵ **授業科目**……「論理国語」

⑶ **単 元 名**…… 単元「環境に関する意見ポスターを作ろう」

⑷ **教材編成**…… 「『環境』とは何か」（上垣崇英／東京書籍『精選論理国語』）

⑸ **単元の構想**

実践研究Ⅰ・Ⅱを通して、文学的な文章のリライト、二つの説明文を生かした意見文を作成してきた。そこで、学年も進級し、高校二年生となった「論理国語」では、大学入試共通テストでも出題が予想される「実用的な文章を書くこと」を単元の中心にもっていきたいと考えた。具体的には、意見ポスターを作成し文化祭で展示することを目指した。ポスターでは、視覚的な要素も重要になってくるので、一つ一つの言葉を精選する必要が生まれ、より語句を理解し、大切に使うことが語彙を豊かにすることにつながっていくと考える。

テーマは、「環境」を選択した。理由としては、入試頻出テーマであり、身近な問題であり、生徒にも親しみやすいテーマであると考えた。使用教材には、上垣崇英氏の「『環境』とは何か」を選び、身近な「徳島の環境問題」について考えることにした。

語彙習得の目標としては、今回は「生徒自身が身につけたいと思う語句」というものを選定させて、それを身につけることをゴールにした。実践研究Ⅰでは、教師側がある程度推奨される語句を提示した部分があり、実践研究Ⅱでは、生徒の「わからなかった語句」を取り上げた。この実践研究Ⅲでは、教科書教材「『環境』とは何か」に出てくる語句を、「使用語彙」「理解語彙」「未知の語彙」に分け、理解はできるが使用することのできない「理解語彙」と初めて出会う「未知の語彙」の中から、生徒自らが高校生として「身につけた方がいいと思う語句」を１０個選ばせて、ポスターの中でできるだけ使うように指導した。教師からも、「身につけてほしい語句」として１０個提示し、選択の参考とさせた。新学習指導要領の「３論理国語」の「３内容　〇語彙」のところに「イ　論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること」とある。さらに、具体的な例として「示唆」などが論証に必要な語句の例として挙げられていたので、私からもこの学習において、「身につけてほしい語句」として提示した。

１０個の「身につけたい語句」の中から、いくつ使えばいいのか、どのようなポスターにすればいいのか、ルーブリック評価を用いることで、互いにゴールと評価を明らかにしながら指導を行った。

⑹ **単元の指導の実際**

①第一次　導入…「意見ポスターを書く」という単元全体の構想と目標を明らかにさせる。

第一学年で学習した『羅生門』と「黄色い花束」の実践を振り返り、「文学的作品のリライト→随想に関する意見文」と学習してきたことを確認する。今回は、説明的な文章を読み、環境に関する「身につけた方がいいと思う語彙」を選び、それを用いた意見ポスターを書くことを確認する。作成した意見ポスターは、文化祭で掲示することを告げ、テーマは「徳島における環境問題」であり、一般公開も視野に入れた「書くこと指導」の総まとめ的な活動になることを確認する。

②第二次　展開１…上垣崇英「『環境』とは何か」の指導

上垣崇英「『環境』とは何か」を基に、環境について考えさせる。「『環境』とは何か」を教師が範読し、「理解語彙」や「未知の語彙」を抽出させる。書くことの単元であるので、精読ではなく、要点をつかみながら読解指導をする。

③第三次　展開２…「身につけたいと思う語彙」を使った意見ポスターの作成

「使用語彙」「理解語彙」「未知の語彙」とは何か、定義を説明し、展開１で学習した教科書教材より、高校生として身につけたい語句を抽出させる。抽出した語句をふせんに書き、グループ（ペア）に別れたあと、それぞれの「理解語彙」「未知の語彙」を比較し、その後、グループ（ペア）で「身につけたい語句」を１０個選ぶ。「使用語彙」とは、理解することも使用することもできる語彙であるので、それ以外である「理解語彙」と「未知の語彙」より、生徒自身で「高校生として身につけたい語句」を１０個選ばせる。

そして、徳島の環境問題に関するテーマを２０個提示し、そこからグループ（ペア）で、一つ選択させる。（他のグループとは同じにならないようにわける。）テーマが決定すれば徳島の環境問題について、インターネット（一人一台端末）などで調査する。その後、ポスターの手引きを参考に、下書きプリントを作成し、指導者がチェックした上で、実際に、ポスターをパソコンで作成する。

④第四次　展開３…作成した意見ポスターを評価し、発表する

ルーブリック評価を用いて、自己評価をしたうえで、作成したポスターをクラスで発表する。

⑤第五次　まとめ…授業のまとめ

アンケートを行い、実際に語彙が増えたと感じてるのか、感想を問う。文化祭で提示し、実際に一般の方にみてもらう。

⑺実践の成果と課題

まず、成果として挙げたいのは、「手引きと下書きの有用性」である。今回は集大成ということもあり、実践研究Ⅰ・Ⅱの反省をふまえ、単元構想にも時間を費やし、単元のゴールを明確に設定し、学習の手引きを作成した。その中で、評価の方法（ルーブリック評価）やポスターの手本を事前に示しておくことで、生徒も活動をイメージしやすく、結果として目標に的確に到達することができた。「下書きを書かせてチェックする」というのも有用で、ポスター作成においても、下書きができていれば、清書をタブレットで作成するのは、それほど時間もかからず、スムーズに行えた。改めて下準備の大切さを実感した。

次に、グループ活動では、ペアで行うクラスと４人グループで行うクラスの２つのパターンを作った。この実践研究では、「班員との協力」「ワードなどの ICT スキル」「調べ学習をする力」が必要とされ、やはり４人グループであれば、誰かしらがリーダーとなり、調べ学習を行うことができ、成果物がしめきりに間に合わないということは、なかった。しかし、４人であると、人間関係などもあり協力できる班と協力できない班があったり、スキルの高い生徒に任せっきりになってしまって、活動の少ない生徒が出てきてしまったりした。「書くこと」を授業の中心に据えておきながら、果たして４人全員がポスターの内容を「書いた」のか、というところには疑問が残ってしまい、それは指導者の指導力不足によるものである。理想は、生徒それぞれに ICT で調べる、書くなどのスキルがあれば、ペアでポスターを作成する、もしくは一人一人全員がポスターを作成する方が「書くこと」の授業にはふさわしいと反省する。（しかし、生徒の実態としては、今回のやり方がベストではあったと思う。）

最終的には、協力すること、環境について調べること考えること、ICT スキルの獲得、実用的な文章（ポスター）を実際に自分で作ること、など多くの学びを得ることができた。ポスターも内容、装丁ともに素晴らしいものが多く、がんばってくれた生徒に感謝したい。その一方で、一学期中間テスト前後の５月から６月末まで、すべての授業をポスター１枚に注ぎ込むことになってしまい、多くの学びを得たものの、調べ学習の時間では、総合的な探究の時間のようになってしまい、国語科の「書くこと」の授業としてのコストパフォーマンスとタイムパフォーマンスに課題が残った。これは今後の課題としたい。

【生徒感想】

・手書きとは違って、簡単に文章の直しができたり、画像を貼れたりできるのでやりやすかった。
・手書きよりも、ICT を使って書く方が速く文字を打てるし、間違えたところを直すことができて便利。
・表などを貼ることで自分の主張をわかりやすく表すことができた。
・自分ではいいと思った文章も相手からしたらイマイチであるとなった時、すぐに変えることができた。
・自分の知らない語彙の意味を知るだけでなく、ポスターなどを通して使用語彙に変えることができてよかった。
・自分でポスターを作った時に主張が長すぎたりしたため、文の全体の構造を考えて、バランス良くすることが、今後の改善点だと思った。
・今回の意見ポスターでは、今まで知らなかった徳島の問題に目を向けることができた。
・理解語彙、使用語彙を増やすことができて表現が豊かになり、文章が書きやすくなったと感じた。
・先生の作ったポスターを元に、自分たちで使おうとした語彙を織り交ぜようとすることが楽しかった。
・語彙をたくさん知っていると、いいことがたくさんあることに気づきました。
・普通の授業よりも、みんなが自発的に取り組んでできる学習だと思う。難しい言葉を使って文章を書く、ということは、日常生活ではなかなかする機会がないので、良かった。

授業プリント①

「意見ポスターのテーマを選ぼう」

☆授業者より、身につけた方がいいのではないか、という語句１０選

仮に　果たして　示唆　社会環境　持続可能性　基盤　自然淘汰　媒介　側面　分相応

☆班員

☆選んだテーマ

（　　）番

①徳島における森林破壊
②徳島における生物多様性の喪失
③徳島における海のゴミ
④徳島におけるバイオ燃料
⑤徳島における節電
⑥徳島におけるフードロス
⑦徳島における古民家再利用
⑧徳島におけるマイカップ運動
⑨徳島における公害問題
⑩徳島における吉野川
⑪徳島バスの水素バス
⑫徳島市にイノシシ
⑬大塚製薬の「ボトル to ボトル」
⑭上勝ゼロウェイスト
⑮上勝いろどり
⑯神山フードハブ
⑰三好市廃校再利用
⑱阿佐海岸鉄道ＤＭＶ（デュアルモードビークル）
⑲那賀のバイオレザー
⑳その他（なんでも）

授業プリント②

「意見ポスター」まとめ・評価しよう！

名前（　　）

☆班で「身につけたい」と選んだ語句１０個

☆ルーブリック評価（自己評価）それぞれ当てはまるところに〇をつける

評価基準	A	B	C
自分たちが身につけたいと選んだ語句を使っている	５個以上	３個以上	２個以下
自分たちが選んだ語句を正しく使えている(使用語彙になった)	８割以上	５割以上	４割以下
見出しがはっきりしており、主張と根拠が明確である	見出しがあり、主張と根拠がそれぞれ明確である	見出しがあり、主張が明確である	主張があいまいである
写真や図、グラフを使っている	写真や図、グラフを２つ以上使っている	写真や図、グラフを１つ以上使っている	写真や図、グラフを使っていない

☆いいと思ったポスターを選ぼう！

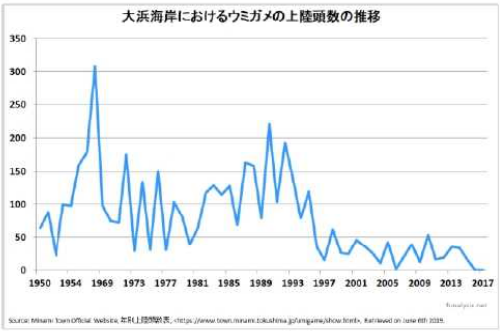
１位　テーマ（　　）

選んだ理由

☆ポスターを作ってみて、評価してみて、感想・反省点・工夫したところ

授業者作成、ポスター見本

ウミガメはなぜ減っているのか



「日和佐うみがめ博物館カレッタ」のホームページによると、阿南のまちとうみがめの出会いは、1950 年。当時は食糧難であったため、肉をとるために無残に殺されたアカウミガメの亡骸を日和佐中学校の生徒と先生が見つけ、悲しんだ末に「海の使いであるウミガメを知ってもらおう」と研究を始めたようである。

現在、「ウミガメがビニール袋を食べて死んでいる」とよく言われているが、実はこれは稀なケースで、ほとんどの場合は死までは至らないようだ。では、なぜウミガメが減っているのか。原因は大きく「砂浜の消失」と「夜間の照明」の二つにある。ウミガメの赤ちゃんは光に向かっていく性質があるため、明るい砂浜では、海に正しく向かうことができないのである。そこで、日和佐うみがめ博物館カレッタのある美波町の大浜海岸では、産卵期の夜間は人の出入りを制限し、ウミガメに影響する街灯を消すなど、ウミガメが安心して何度でも訪れてくれる「砂浜環境創り」をすすめている。

見出し、主張、根拠がはっきりわかるように段落などを工夫する

人間中心主義の環境保護からの脱却

「環境とは何か」の中で筆者は、「社会環境」と「自然環境」の二つがあると述べている。今回のウミガメの例で言えば、野生動物のウミガメの生き方はさほど変化がないにも関わらず、日本では 1950 年の時点においてウミガメを食物として捕獲しており、現代では食用とはしなくなったものの海岸が明るすぎるために産卵ができない、といったように「社会環境」が大きく変化しているために、ウミガメの生態環境にも大きな影響を与えてしまっている。

そこで、私は「人間中心主義の環境保護」でない環境保護をすべきだと考える。人間が生活を変化させていくことで、今後も社会環境は変化していくが、この日和佐におけるウミガメ保護の取り組みのように、人間が生活をしていく中でも、他の生物の生態系や自然環境のことを思いやりながら環境保護をしていくことは可能だと考える。それが、現在よく言われている「持続可能性」につながっていくのだ。

「身につけたい語句」の部分には、下線を引く

６．まとめ

今回は「生徒の語彙を増やすこと」と「一人一台端末を利用して書くこと」をテーマにして実践研究を行った。

まずその背景には、コロナウイルスによる影響が多大にあった。生徒は休校を余儀なくされ、この授業もZOOM で行ったこともあった。書くことの授業で、成果物の発表会であるにも関わらず、マスクをしてそれぞれがタブレットとにらみ合い、一言も発さず作品発表、評価、フィードバックまで終わった授業は考えさせられるものがあった。その事象が、「徳島県 GIGA スクール構想」を加速・発展させた良い面もあったにせよ、それにより言語コミュニケーション、活動の制限など、失われたものは大きいだろう。それを取り返していくために、国語科はより言語活動を重視し、実りある授業を行っていかなければいけないと感じる。

【アンケート分析】

問：ICT で文章を書くことが得意だ。　「あてはまる」３０％（高一）→４０％（高二）　微増

問：自分の意見や感情を言葉で表現することができる。　「あてはまる」３５％（高一）→８１％（高二）

問：周りの助言を参考に文章を整えることができる。　「あてはまる」５９％（高一）→９１％（高二）

問：黒板よりも電子黒板がいい。　「あてはまる」６０％（高一）→４８％（高二）

問：ポスターなどの書くことを通して語彙が増えた。（高二のみ）　「あてはまる」９７％

問：この学習を通して ICT を扱うことが上達した。（高二のみ）　「あてはまる」８７％

問：手書きよりもパソコンが書きやすい。（高二のみ）　「あてはまる」８１％

問：この学習を行い、自分の気持ちを伝えることが上達した。（高二のみ）　「あてはまる」８１％

次にアンケートの結果だけを見れば、目標の多くを達成しているように思われる。特に注目したいのが、『自分の意見や感情を言葉で表現することができる。』「あてはまる」３５％（高一）→８１％（高二）である。語彙を増やしたことで、すこしでも自分の意見を的確に表現できるようになったならば、この実践の成果と言えるだろう。それを抜きにしても、授業の感想によると、未知の語句に出会い、調べ、制限のある課題の中で使うというのは、生徒の中で思ったよりも挑戦しがいがあり、楽しかったようである。今回は、難しい環境用語が多く、その意味を調べ、苦心して表現の中で語句を使うということが、語彙獲得の重要な経験になったように思う。

最後に、現代社会や日常生活においても、「書くこと」の質や内容は変化してきているように感じる。現代では、我々も含めて、チョークやボールペンで文字を書くよりもパソコンで文字を「打つ」量の方が多い職業が増えてきているのではないか。それに合わせて、「書く」授業も変化していかなければいけないのかもしれない。ただ、人として、「言葉を大事にすること」「言葉によって思考・表現すること」など、大切なところは不変であるとも考える。新学習指導要領になるタイミングで、新しい授業というものを考えていきたい。

しかし、実際には、ICT を生かした授業を行おうとすると、パソコンやタブレットの使い方に始まり、Word や TEAMS などのインターネット上での提出の仕方、インターネットの回線の悪さによる不具合への対応、「ChatGPT」で書かれてないかチェックすること、そして AI が書いたものかどうか見極めることなど、「国語」の授業の範疇なのかもわからないところの指導が大変だったのは事実であり、課題が山積みである。

さらに前段では、「実りある授業を」「言葉を大事にすること」と自ら言っておきながら、「どのくらい語彙が増えたのか」までは、測ることはできず、課題が残る。しかし、この発表の場を与えていただいたことに感謝し、ご指導いただき、今後の糧としたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

生徒作品①

51HR

竹で作るバイオレザー

「バイオレザー」とは、天然素材など植物由来の素材から作られたレザーである。徳島県那賀町では、竹を材料に作られている。リンゴやキノコなどでも作れるのに、なぜ竹を材料にしたのだろうか。その理由は、徳島県は竹が豊富であるがゆえに、竹の有利な環境となり他の樹林は自然淘汰される。また、放置竹林が増えるなど竹害が起こっているからだと考えられる。

古くから私たちと関わりのある竹は繁殖力が高く、早くて３年で成長するため動物たちのように絶滅の危惧の可能性も少ない。バイオレザーの材料に竹を使用することで、竹害を防ぐことも可能である。さらに、材料の入手から製品化までを徳島で行うことができるため６次産業化となっている。

バイオレザーのメリットは大きく２つある。１つ目は、エコで持続可能性のある商品だということだ。バイオレザーの寿命は２～３年と普通のレザーより短いものの、最終的に土に還り、さらに燃やしたとしても排出する CO_2 の量と竹のときに吸収した CO_2 の量が等しくなり、カーボンニュートラルな取り組みとなる。２つ目は動物を殺す必要がないことだ。これは、社会の変遷過程で、動物を保護し命を守るという思想が広まったことを示唆している。

様々な視点から考える環境

「環境とは何か」の中で筆者は、「環境を守る」と言っても、それが「何者」にとっての「環境」指すものなのかを忘れてはならないと述べている。この場合、私たちは自分たち「人間」にとっての環境、「革として命を奪われてしまう動物たち」にとっての環境、「竹害によって悪影響を受ける植物たち」にとっての環境など様々な視点から考える必要があるということだ。「人間」からすれば、動物を殺したくないという倫理面での負担軽減や持続可能性への貢献があり、「革として命を奪われる動物たち」からすると、狩りなどにより絶滅する恐れが減ります。「竹害によって悪影響を受ける植物たち」からすると、竹害が防がれるため生態系を保つことができ、様々な視点からでもメリットを持っていることがわかる。このように、人間中心の環境だけでなく、関連するものの環境の変化、メリットを考えたうえで持続可能な商品の開発や社会をつくっていくべきだ。

徳島市のイノシシ

51HR

イノシシとごみ

令和3～5年の間に、徳島市で30件ものイノシシの目撃情報が報告されているのはご存じだろうか。徳島市内ではイノシシによる人体事故や農作物被害が増え、眉山周辺や西部の山沿いの住宅街にも行動範囲が広がっている。イノシシだけではなく、シカやサルも多く見られている。なぜ、野生動物は環世界を抜け出し、人里までやって来るのか。

「それは人間が自然環境を破壊し分相応に生きていないからだ。」といった声が近年大きくなっている。しかし、最も大きな原因として徳島市の調査では、「動物がエサを簡単に手に入れることができる環境である」ということが分かった。徳島は現在、ごみの排出率は、全国で20位である。野菜屑といった生ごみを田畑に捨てる、家庭ごみをごみ置き場に出す、お菓子を道に捨てる、どれもイノシシにとってはごちそうだ。人里に現れたイノシシをジビエ料理にし、お客にふるまう料理店は徳島市に何件か存在する。しかし、現在の徳島では根本的な対策が行われていない。野生動物は基本的に固有の生態系から出てくることはなく、人間も問題に関わっているのだ。

エコロジー社会を目指す

野生動物が簡単にエサを手に入れられる社会は、持続可能な社会とは違う。地球は自然環境という基盤の下で生物が栄え、現生生物が今を支え、生命をつないできた。人間が、自分たちの都合のいいように現状を受け止めてはならないのだ。

イノシシが徳島市に現れないようにするには、「エサ」が手に入らない環境を作ることが大切になってくる。まず、ごみ置き場にごみを出すときはその日の朝にごみを出しておくという案を上げる。これはイノシシが匂いにつられてやってくる前にごみを処理することができると考えられる。

また、野菜屑を積極的に減らすためにいらない野菜は知り合いや親族にあげてはどうか。道端にお菓子を捨てないことも野生動物を引き付けないために有効である。しかし、1度徳島市に来ることを覚えてしまったイノシシを2度と徳島市に現れないようにすることは困難を極めるそうだ。ジビエ料理にし、イノシシの存在をなくし持続的だとするのは正しいのだろうか。

エコロジー社会とは、人間にとっての「持続可能性」、つまり人間にとって都合の良い社会ではなく、私たちの周りを取り巻く自然にとっての持続可能な社会なのだ。これまでの人間の愚かな行いが重なり、徳島市にイノシシの被害が発生した。これは人間の社会環境に対する、自然環境からの警告ではなかろうか。今一度、私たちは胸に手を当て持続可能性について考えることが求められている。